2012年9月17日
0:17

いかれちまつた苦しみに

弐式

俺の心臓はポンコツで、夜になると特に具合が悪い。寝つこうにも寝つけず、寝返りばかり重ねていたおかげで近頃は枕も俺も疲弊気味だ。そこに健康そうな顔をした君が来たものだから、嫌味の一つでも言いたくもなる。君は人生楽しそうだなあ。俺ときたら最近めっきり心臓がやられちまって。

「じゃあとっかえてあげようか」

などと君はかわらない呑気な顔で言うものだから、すっかり頭にきた俺は君にお願いした。君の枕をがんばってすり減らしてくれたまえ！　俺はにっくき俺のポンコツハートにこっそり願掛けすらしたぐらいだ。この苦しみを味わうといい！

ところが誤算だった。なんと君の心臓もポンコツだったのだ！　しかも俺のにさらに輪をかけたポンコツっぷりだ。寝るときはいざ知らず、日中だって大暴走で、ぐりぐり、ぐりぐり俺を苛む。かわいらしい呑気な顔して、君は大変な不良債権を俺にまんまと移植した。聞いてないぞ！　文句を言いたくて君に電話を掛けた。コール音３回目で心臓がひどく傷んだ。それからコンマ２秒ぐらいで君が出た。心臓は痛いままだ。

「聞いてないわ！」

俺が言う前に君が言った。俺の、いや今はもはや君のものだが、その心臓だって悪化の一途らしい。そりゃあ俺の心臓はもともとポンコツだったんだ。悪くもなるだろう。俺は何一つ嘘なんてついちゃいない、ひどいのは君のほうだ。かわいらしい健気な顔して、俺にくれたのは壊れかけの廃品ハート。

「だってあなたがひどいこと言うから！　この苦しみを味わってみればいいと思ったのよ！」

枕をすり減らしてくれたまえ！　とでも言いだしそうな口調で君が言った。君の枕は実はとっくにすり減っていた。俺が願掛けをするずっと前から。俺の枕がすり減り始めたごろから。

何のことはない、俺たちは同じだったのだ！

ばかばかしい、こんな通話を止めにしようとケータイのディスプレイに目をやると、君の名前がこれまた馬鹿らしく輝いて表示されている。「うっ」電話口の向こうで君が呻いた。俺の心臓の具合はどうだい、たいそう悪いみたいじゃないか。心臓が痛すぎてむしゃくしゃしていたので、嘲笑混じりに言ってやった。君はしばらく無言で、てっきり怒ったのかと思ったけれど、違った。なんだか心臓の具合がひどく悪いらしい。ついでに言うと俺の心臓もさっきから一層ひどく痛んでいる。ぐらぐら、ぐらぐらと尋常ならざる痛みが俺を襲う。頭の中を奇妙な空想がかすめる。君の吐息の苦痛がさらに濃くなる。

「わかった、あなた、私の、せいで、心、臓が、痛いのね」

俺の頭に浮かんだ空想の反対を君が言ったものだから、俺はついに観念した。君は俺のせいで心臓が痛いんだろう。口に出すと、いままでの心臓の痛みが嘘みたいにひいて行った。代わりにどくどくという俺の血流が君にも聞こえるんじゃないかってぐらい激しく、君の心臓は激しく脈打つ。ぐつぐつ、ぐつぐつ。

「こんなことなら、さいしょっから取り替えたりな

んかせずに半分こすればよかったね」

電話口の向こうで君がかわいらしく健気で可憐な声して笑うから、それはいい考えだ、と俺は頷いた。君の左心房にぴったり寄り添うように、俺の右心房が返ってきた。俺たちの心臓は最初からそうだったみたいな顔をして、交わって、一つになり、情熱的に互いの体液を交換し合い、体液さえも一つになって、やがて動きを止めた。

大誤算だ！

俺はB型で、君はO型なんだった！